

「明日もまた来たい学校」を目指して

～岐阜市の総合的な不登校対策～

岐阜市教育委員会 学校安全支援課

1 はじめに

岐阜市教育大綱において「一人ひとりが価値ある大切な存在として互いに認め合う教育」を掲げている。全市で一丸となり、すべての子どもたちが自らの才能を開花させ、幸せな未来をつくり出す力を培う教育を推進している。

その具体的な施策の一つとして、令和3年4月、本市で東海地方初の公立不登校特例校「草潤中学校」（現 学びの多様化学校）を開校した。草潤中学校では、様々な理由で不登校となった児童生徒の8割が登校でき、生徒は自分らしさを取り戻し、卒業している。

開校当時の教育目標「ありのままの君を受け入れる新たな形」から現在の教育目標「ありのままの自分で学ぶ」と進化してきた草潤中学校での教育実践から、子どもの少なくなったエネルギーが再び満ちていく過程にとって何が必要であるかが分かってきた。それは、子どもが過ごしたい・学びたいと願う「①安心できる居場所の確保」がされ、ありのままの自分を受け入れてくれる「②信頼できる大人の存在」があり、活動内容を自分で決めて、自ら行動する「③『選択と行動』のプログラム」があることの3点である。

2 草潤メソッドの水平展開

不登校対策が学校教育の重要課題の一つであるといわれている今、本市では、「明日もまた来たい学校」づくりに向け、上述した3つの草潤メソッド（「安心できる居場所の確保」、「信頼できる大人の存在」、「『選択と行動』のプログラム」）の全小中学校への水平展開に取り組んでいる。

（1）校内フリースペース（校内教育支援センター）

校内フリースペースを、令和5年度に中学校5校、令和6年度にさらに中学校5校に設置をした。校内フリースペースには、常に担当教職員が常駐し、生徒の多様な学びを見守ったり、支えたりしている。当初、校内フリースペースは比較的欠席日数の少ない生徒への長期欠席の未然予防というコンセプトで整備したが、長期欠席の生徒も多く活用しており、通学しながらエネルギーを充填する生徒にとって安心できる居場所となっている。

校内フリースペースは草潤メソッドをふまえ、「学習を行う場」であることに加え、「自分で生活をセルフデザインする場」としても運営している。既存の学校内に設置するという利点を生かし、科学館による出前授業、学校設備に対するボランティア活動、児童館を活用した活動、学生ボランティアの協力等、独自の取組を位置付け、生徒の多様なセルフデザインを実現できるようにしている。

（2）心と体の健康アプリ「ここタン」

岐阜市では、心が満タンに満たされることを願って「ここタン」と命名した一人一台タブレット専用アプリを、毎日の心と体の健康チェックに活用している。主となる機能は大きく2つある。

1つ目は、日々の心の様子を数値で表し、心身の変化が可視化できるようになっている点である。毎日入力続けることで、子どもが自身の行動と感情を結び付けて日頃の生活を見つめ直したり、教職員が小さな変化やSOSを早くキャッチしたりできるようになっている。

2つ目は、児童生徒が相談する相手を自分で選んで、SOSの信号を出すことのできる「きいてほしい」ボタンを備えている点である。ボタンが押されると、すぐに該当の教職員を中心に対応し、その子

に寄り添ったタイミングや場所、方法での教育相談を実施している。

日常の様子から気づきづらい小さな心身の変化を、「ここタン」によって把握し、教職員が声をかけたり、保護者と情報共有をしたり、関係機関と協力して対応したりすることで、子どもたちの心身の安定につながっている。

(3) オンラインフリースペース「みちる〜む」

メタバース空間を活用した「みちる〜む」と名付けたオンラインフリースペースを週2回開いている。12月末現在、登録者125名、延べ373名の利用がある。岐阜市教育委員会の指導主事や科学館、歴史博物館の職員が授業を行ったり、通信制高等学校の紹介をしたりするなど、様々な内容を発信し、子どもたちの学びの場を充実させている。

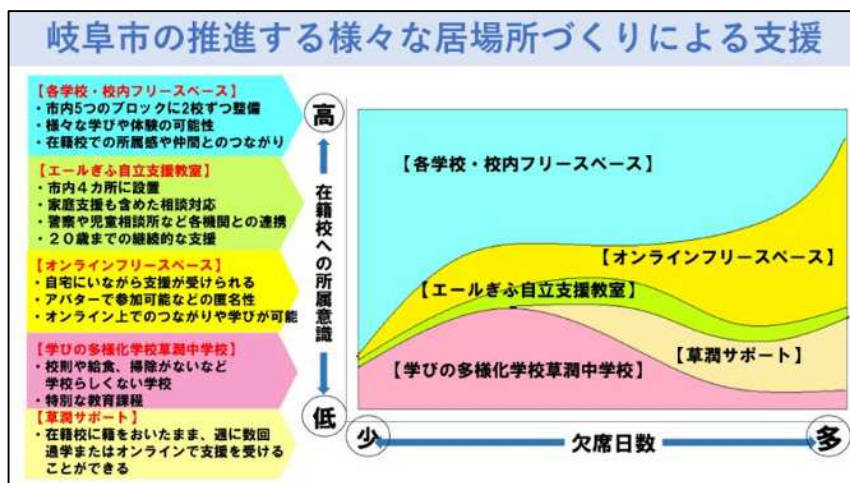
3 今後の取組として（学校の風土の「見える化」）

令和5年3月に文部科学省にて「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策」（COCOLOプラン）が取りまとめられた。社会全体で実現すること、目指すべき姿の1つとして「学校の風土の『見える化』を通して、学校を『みんなが安心して学べる』場所にすると述べられている。

これまで教職員は、子どもが行動でSOSを表しているときに支援を行うことが多かった。また、心にSOSを抱えた子どもたちが不安を表出しやすい環境を整えることに注力してきた。しかし、これらはSOSを発した子どもたちへの対処的な支援である。新たな不登校を生まない、だれもが安心して学べる場所にしていくためには、予防するという視点で子どもたちの支援に取り組む必要がある。SOSを抱えながらも表出できない子どもに気付くこと、そして、すべての子どもたちにとって、学校・学級が心地よく安心できる場所となるように、いわゆる学校の風土をよくしていくことが今後求められる。

これまで学校の風土は、教師が感覚的に捉えてきた部分が大きい。この感覚的で曖昧であった学校の風土を、共通の観点で捉え、教師が同じ認識をもった上で、学校や学級を経営することが新たな不登校を生まない取組になると考えている。

その取組の手掛かりとなるのは、前述の3つの草潤メソッドである。現在、草潤メソッドを観点にし、可視化されたデータをもとに、客観的な分析による、不登校の未然防止策について検討を始めているところである。



4 おわりに

全国で不登校児童生徒数が増加する中、本市においても、令和元年度から5年間でほぼ2倍となり、出現率も全国と比較して高い傾向にあったが、令和5年度は前年度と比べ、ほぼ横ばいという結果となった。

COCOLOプランに先駆けて取り組んできた本市における総合的な不登校対策の一定の成果であると分析している。しかしながら、依然として不登校児童生徒が多い傾向は変わらない。どの子もかけがえのない学生時代を過ごすことができるよう、今後もさらなる不登校対策を推し進めていきたい。